

薬の伝言板 ～排尿トラブル～

No.241 2017年12月
丸子中央病院 薬局



尿のトラブルでお悩みの方は意外と多いものです。「トイレが近い」「トイレまで我慢できずに漏れてしまうことがある」「おしっこが出づらい」「すっきりと全部出た気がしない」。

今日はそのような症状を起こす「過活動膀胱」と「前立腺肥大症」について説明します。

【過活動膀胱】

過活動の文字通り、膀胱が過度に活動するために、尿がそれほどたまっていないのに尿意をもよおしてしまう病気です。



○原因

脳梗塞や脳出血などの原因により脳と膀胱を結ぶ神経の回路に障害が起きることで起こる病気ですが、そのほかにも加齢などにより骨盤底筋が弱くなったり、前立腺肥大症の排尿困難により起きることもあります。

※骨盤底筋：骨盤の底にあり、膀胱を下から支え、尿道や肛門を引き締める働きをしている筋肉。

○薬による治療

薬物療法を行うことが一般的です。



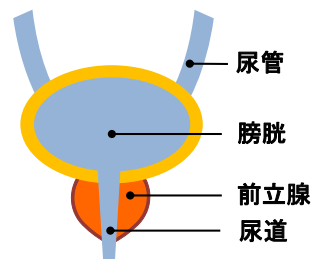
	抗コリン薬（成分名）	β3受容体刺激薬（成分名）
治療薬	ステーブラ（イミダフェナシン）、 ベシケア（ソリフェナジン）、 バップフォー（プロピペリン）、など	ベタニス（ミラベグロン）
作用	排尿筋をコントロールしている自律神経に作用して、膀胱の筋肉の過度の収縮を抑えます。	自律神経に作用して、膀胱の筋肉を緩めます。
副作用	口渇、尿がでにくくなる、便秘、発汗 * 排尿困難な方など服用できません	口渇・便秘 * 抗コリン薬より発現率は低い

【前立腺肥大症】

前立腺は男性のみ有する器官で、膀胱の下に存在し、尿道の周りを取り巻くように位置しているため、年齢と共に前立腺が肥大すると、尿道や膀胱が圧迫されて尿が出づらくなる病気です。前立腺肥大症は二次的に膀胱の変化を誘発するため、過活動膀胱を合併することが多い病気です。

○原因

前立腺肥大症の原因については、加齢に伴う男性ホルモンの分泌の変化が原因と考えられています。



○薬による治療

薬物療法を行うことが一般的です。薬物療法で効果が不十分な場合や症状が重い場合、尿閉などがある場合は手術療法を考えるなど、患者さんの症状や重症度に合わせて選ばれます。

	選択的 α 1受容体遮断薬 (成分名)	5 α 還元酵素阻害薬 (成分名)	抗アンドロゲン薬 (成分名)
治療薬	ハルナール (タムスロシン)、 フリバス (ナフトピジル)、 ユリーフ (シロドシン)、 エブランチル (ウラピジル)、	アボルブ (デュタステリド)	プロスタール (クロルマジノン)
作用	前立腺内の筋肉の過剰な収縮に対し自律神経に作用する事で、筋肉を弛緩させて、尿道の通りを改善します。	前立腺に対する男性ホルモンの作用を抑制することによって前立腺肥大を抑えることで、尿道の閉塞を改善します。	

日常生活での注意点

- ◎ **適度な運動をする**：血液の流れが良くなり、排尿がスムーズになります。
- ◎ **体を冷やさない**：特に下半身を冷やさないようにしましょう。
- ◎ **適度な水分をとる**：尿量を増やすことで排尿がスムーズになります。
- ◎ **利尿作用のある飲料を控える**：アルコール類、お茶やコーヒーなど。



排尿トラブルは診察が恥ずかしい、または老化によりある程度は仕方ないと思いついておられるため受診せずに放置されていることも少なくありません。しかしながら排尿障害があると外出や運動を控えたり、尿失禁により気分が落ち込んでしまったり生活の質を失う原因にもなります。

また症状が似ていても他の病気の可能性もあるため、正しい治療を行なうためにも、気になり始めたら早めの受診を心がけましょう。